

アルマンドの起源について

著者名(日)	今谷 和徳
雑誌名	共立女子大学文芸学部紀要
巻	62
ページ	23-46
発行年	2016-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00003101/



アルマンドの起源について

いま たにかず のり
今 谷 和 徳

はじめに

中世以来ヨーロッパでは舞踏が盛んで、様々な種類の踊りが踊られてきたことについては、いくつもの文献、さらには舞踏の伴奏音楽である舞曲の楽譜が数多く伝えられてきたことなどから、はっきりとみてとれる。とくに、16世紀から18世紀にかけて踊られていた舞踏に関しては、その踊り方を記した文献がいくつか存在するだけでなく、その伴奏音楽である舞曲が、やがて観賞用の音楽として作曲されたり、それらがまとめられて組曲の形で演奏されることが多くなされるようになり、他の時代の舞踏以上に注目に値する。

たとえば、18世紀前半の最も重要な作曲家の1人ヨハン・ゼバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750) は、《フランス組曲》、《イギリス組曲》、《パルティータ集》といった、鍵盤楽器のための舞曲組曲を残しているが、それらは、当時の典型的な舞曲であったアルマンド *allemande*、クーラント *courante*、サラバンド *sarabande*、ジグ *gigue* を核とし、それに他のいくつかの舞曲を差しはさむという形で構成されている。そのうち、常に初めに置かれている舞曲アルマンドは、16世紀から17世紀の前半の時期に実際に踊られていた舞踏アルマンドのリズムを基に書かれたものだが、一般に舞踏アルマンドはドイツに起源をもっていると言われていた。しかし、16世紀の後半に書かれたある文献を読み直してみると、その定説に疑問をいだかざるをえない。本論では、そのアルマンドの起源について考察し、問題提起をすることにした⁽¹⁾。

1. アルマンドに関する現代の事典の項目

(1) 舞踏の事典

アルマンドという舞踏に関して、現在ではどのようにとらえられているのだろうか。たとえば、舞踏に関する最も重要な事典である「ダンス国際百科事典 *International encyclopedia of Dance*」のアルマンドの項目を見てみると、次のようになっている。

「アルマンズの語（中略）は、〈ドイツの〉を意味し、15世紀から19世紀までの間に用いられたいくつかの異なった踊り、あるいは動きの型にあたる。この語は本来、ドイツ起源とされたり、もっぱらドイツ的な性質をもつと考えられる特質を示すために用いられたものと思われる。The term *allemande* (…), meaning “German,” applies to several different dances or types of movement in use between the fifteenth and the nineteenth centuries. The word seems to have been used primarily to denote characteristics that were either ascribed a German origin or considered to have uniquely German qualities.」⁽²⁾

ここでは、アルマンズの起源はドイツにあるのではないかとされている。

(2) ドイツ語の音楽事典

では音楽辞典ではどうなっているのだろうか。まずドイツ語による最大の音楽事典『歴史と現代における音楽 *Die Musik in Geschichte und Gegenwart* (以下、MGGと略)』の第2版のアルマンズの項目は、以下の通りである。

「アルマンズ（中略）は、16世紀から18世紀の終わりまでの踊り、および器楽形式として知られている。初期の理論資料の中で一致しているのは、アルマンズが、“ドイツ人によって踊られていた、中くらいの速度の踊り”（トワノ・アルポー、1588、67頁）であり、“ガイヤルドほどすばやくも活発でもない”（プレトリウス、シンタグマ・ムジクム第3巻、1619、25頁）、ということである。Die Allemande (…) ist als Tanz- und Instrumentalform vom 16. bis zum Ende des 18. Jh. nachweisbar. Frühe theoretische Quellen stimmen darin überein, daß die Allemande »ein bei den Deutschen gebräuchlicher Tanz von mittlerem Zeitmaß« (Th. Arbeau 1588, S. 67) und »nicht so fertig und hurtig [...] als der Galliard« sei (Praetorius S 3, 1619, S. 25).」⁽³⁾

ここでは、初期の2つの文献を引用しながら、アルマンズがドイツ起源であることを述べているが、そのうちの初めの文献については、引用箇所が続く文章を全く考慮に入れていないために誤訳となってしまう。これについてはのちに詳述する。

(3) 英語の音楽事典

次に英語による最大の音楽事典「ニュー・グロヴ音楽事典 *New Grove Dictionary of*

『*Music and Musicians*』の第2版のアルマンドの項目では、次のように記述されている。

「アルマンド（中略）（フランス語：〈ドイツの [踊り]〉；イタリア語でアレマンダ、アッレマンダ）。バロック時代の器楽舞曲の中でたいへんよく知られているもののひとつで、クーラント、サラバンド、ジグととともに組曲の標準となる楽章。それは16世紀の初期あるいは中期のある時期に起源をもち、ドイツでは〈トイッチャータンツ（ドイツの踊り）〉あるいは〈ダンツ〉、イタリアでは〈バル・トデスコ（ドイツの踊り）〉、〈バル・フランチェーゼ（フランスの踊り）〉および〈テデスコ（ドイツの）〉といった題名で現われる。Allemande (…) (Fr.: 'German [dance]'; It. *alemanda, al-lemanda*). One of the most popular of Baroque instrumental dances and a standard movement, along with the courante, sarabande and gigue, of the suite. It originated some time in the early or mid-16th century, appearing under such titles as 'Teutschertanz' or 'Dantz' in Germany and 'bal todescho', 'bal francese' and 'tedesco' in Italy.]⁽⁴⁾

ここでは、16世紀の資料に現われるアルマンドの題名が引用され、それらを見ると、この舞踏がドイツ起源のような印象を受けるが、イタリアで〈バル・フランチェーゼ（フランスの踊り）〉と呼ばれていた例も挙げられており、アルマンドがドイツ起源であるとは必ずしも言えず、事典の項目の筆者は起源論を避けている。

2. 初期の文献に見えるアルマンド

(1) アルマンドの語

アルマンドの語が初めて文献に現われるのは、1521年にロンドンで出版されたロバート・コーブランド Robert Coplande による理論書『バス・ダンスの踊り方 *The maner of dauncyng of bace daunces*』においてであり、ここでは、フランスで踊られていた舞踏であるバス・ダンス basse danse のひとつの名称として「ラ・アルマンド *La allemande*」の語が用いられている⁽⁵⁾。ここには譜例が付されていないので比較はできないが、その元をたどれば、15世紀の後半にイタリアの舞踏家グリエルモ・エブレオ・ダ・ペーザロ Guglielmo Ebreo da Pesaro (1420頃-1484以後?) が著した『舞踏の実践あるいは技法 *De pratica seu arte tripudii*』で挙げられている「サルタレッコ・テデスコ *saltarello tedesco* (ドイツのサルタレッコ)」にあたるのではないかと考えられている⁽⁶⁾。

(2) 舞曲のアルマンド

(i) フランドルの舞曲集

舞踏の伴奏音楽である舞曲としてのアルマンドの語は、16世紀の半ば近くになって出版された舞曲集に初めて登場する。それは、フランドルのリューフエン（ルーヴァン）で1545年から楽譜出版活動を始めた楽譜出版業者ピエール・ファレーズ Pierre Phalèse (1505/10頃-1573/76)が、1546年に出版したリュート独奏用の『撥弦楽器のための曲集第4巻 *Carminum pro Testudine Liber IIII*』で、ここにはイタリア語のアルマンダ *almanda* の名による曲が2曲含まれている⁽⁷⁾。さらにファレーズは、1549年に出版したリュート曲集にも1曲のアルマンドを含めている。ここでの名称はフランス語のアルメーニュ *alemaigne* が用いられている⁽⁸⁾。

フランドルの楽譜出版業者でファレーズと並んで重要なのは、アントウェルペン（アンヴェルス）で1543年から楽譜出版活動を開始したティルマン・スザート Tylman Susato (1510/15頃-1570またはそれ以後)だが、彼は1551年に合奏用の舞曲集を出版しており、その中に8曲のアルマンドが含まれている。ここでの名称もアルメーニュである⁽⁹⁾。

(ii) フランスの舞曲集

フランドルに先立って、フランスでも16世紀の前半に何度か舞曲集が出版されたが、それらにアルマンドは含まれていない。フランスで最初にアルマンドを含む舞曲集が登場するのは1551年のことである。

この年、リュート奏者として活動していたアドリアン・ル・ロワ Adrian le Roy (1520頃-1598)とそのいとこのロベール・バラール Robert Ballard (1530頃-1588)が、パリで楽譜出版業を共同で開始するが、その最初の曲集にあたる、ル・ロワ自身によって作曲されたリュート独奏曲を集めた『リュート曲集第1巻』の中に、2曲のアルマンドが含まれているのである⁽¹⁰⁾。

同じ年、ル・ロワとバラールは、やはりル・ロワ自身の作曲になる『ギター曲集第1巻』を出版するが、ここにも、2曲のアルマンドが含まれ⁽¹¹⁾、翌1552年に出版した、ル・ロワ作曲の『ギター曲集第3巻』にも、やはり2曲のアルマンドが含まれている⁽¹²⁾。

1552年、パリの出版業者ロベール・グランジョン Robert Granjon (1513頃-1589)とミシェル・フェザンダ Michel Fezandat (1538-66に活躍)が共同で、作曲家のギヨーム・モルレ Guillaume Morlaye (1510頃生)が書いた『ギター曲集第1巻』を出版するが、ここにもアルマンドが含まれている⁽¹³⁾。

1557年、フランス最初の楽譜出版業者ピエール・アテナンヤン Pierre Attaignant (1494

頃-1551/52) 没後、その事業を継承した妻のマリ Marie が、作曲家クロード・ジェルヴェーズ Claude Gervaise (1540-60 に活躍) の編曲になる合奏用の舞曲集を出版したが、ここには 8 曲のアルマンドが含まれている⁽¹⁴⁾。

さらに、パリの楽譜出版業者ニコラ・デュ・シュマン Nicolas Du Chemin (1515 頃-1576) が、1559 年から 1564 年にかけて、作曲家ジャン・デストレ Jean d'Estrée (1576 没) によって書かれた舞曲を集めた 4 巻の舞曲集を出版しているが、そのうち 1559 年出版の第 3 巻に 10 曲のアルマンドが、1564 年出版の第 4 巻に 4 曲のアルマンドがそれぞれ含まれている⁽¹⁵⁾。

このように、フランスでは 16 世紀の後半になって、数多くのアルマンドの楽譜が出版されていったことがわかる。

(3) 舞踏のアルマンド

(i) モンテーニュの証言

では、舞踏のアルマンドに関しては、どのような文献に記述されているのだろうか。前述のコーブランドの理論書に見えるアルマンドは、16 世紀の半ば近くから現われる舞曲のアルマンドによって踊られる舞踏とは必ずしも一致しないので、それを除けば、16 世紀後半に活躍したフランスの随筆家ミシェル・ド・モンテーニュ Michel de Montaigne (1533-1592) が 1580 年に残した証言が、アルマンドという舞踏についての最初の記述だと考えられる。

モンテーニュは『エッセー Essais』の著者として名高いが、1580 年 9 月 5 日から 1581 年 11 月 30 日まで、ヨーロッパ各地をめぐる旅をし、その間に見聞した事柄を日記として残している。その日記はモンテーニュ在世中には公けにされなかったが、1774 年になって、『ミシェル・ド・モンテーニュの旅日記 *Journal de voyage de Michel de Montaigne*』としてパリで刊行されている。その中の 1580 年 10 月 17 日のアウクスブルク滞在中の記事に、アルマンドが踊られるのを見たという記述がある。以下、その部分の記述を関根秀雄、斎藤広信両氏の訳で紹介する⁽¹⁶⁾。

「月曜日に我々は、金持だが器量の悪いこの町の或る娘さんと、フッガー家の代理人をしているヴェネツィア人との、結婚式を見にノートル・ダム寺院に出かけた。(中略) フッガー家の人々はたくさんいて、(中略) 彼らの邸宅にも行って二つの部屋を見たが、(中略) 我々はまた、この仲間の舞踏も見たが、みなアルマンド [ワルツに似た三拍子の踊り] ばかりであった。彼らは一曲踊るたびごとに、女性をもとの席につれて行って座らせる。彼女たちは部屋の四方に二列におかれた、赤い布張りの長椅

子に腰をかける。男たちはその間にまじらない。(後略)』

この部分の原文は以下の通りである。

「Le lundi nous fûmes voir en l'église Notre-Dame la pompe des noces d'une riche fille de la ville, et laide, avec un facteur des Fugger, Vénitien : … Les Fugger, qui sont plusieurs, … Nous vîmes aussi deux salles en leur maison : … Nous vîmes aussi la danse de cette assemblée : ce ne furent qu'allemandes. Ils les rompent à chaque bout de champ, et ramènent seoir les dames qui sont assises en des bancs qui sont par les côtés de la salle, à deux rangs, couverts de drap rouge : eux ne se mêlent pas à elles.」 (*Journal de voyage*, éd., Fausta Garavini)⁽¹⁷⁾

このモンテーニュの証言からすると、少なくとも1580年の時点では、アウクスブルクの上流階級の人たちの間で最もよく踊られていたのはアルマンドだったことが推測できる。

ここで問題となるのは、まずモンテーニュがアルマンドを知っていたのかどうか、という点である。16世紀の後半の時期に、モンテーニュの活動拠点であったボルドーあるいはその周辺で、アルマンドが踊られていたかどうかを伝える資料はないが、モンテーニュは、1580年の9月からの旅行の前にパリに滞在しており、当時のパリでアルマンドが踊られていたことはまず間違いないので、彼がこの舞踏を知っていた可能性は高い。ボルドーの上流階級の間であったモンテーニュは、当然他の舞踏が踊れたか、少なくとも知っていたはずなので、アウクスブルクで接した舞踏会で踊られていたのがアルマンドばかりだった、ということに驚いたのであろう。

一方、モンテーニュはアルマンドの存在を知らず、アウクスブルクの人々から、踊られていたのがアルマンドという名の舞踏だと教えられた可能性もある。ただモンテーニュは、ここでこの舞踏の名称をフランス語で記している。もしモンテーニュがここで初めてこの舞踏の存在を知ったのなら、その名称の由来を述べてもよいはずだが、それについては何も触れていない。

さて、モンテーニュのこの旅日記の記述によれば、少なくとも当時のアウクスブルクでは、アルマンドを踊るのが一般的であったと考えてよいだろう。となると、現在アルマンドの起源がドイツにあると一般に言われているのも、当然のように思えてしまうが、当時のアウクスブルクの町を、現代のドイツの一都市と同じようにとらえてしまうのは問題である。それについてはのちに検討する。

(ii) 「オルケゾグラフィ」の記述

モンテーニュは、実はこの旅日記で、アルマンドの踊り方については触れていない。それについては、1589年にフランス東部の町ラングルで出版された、トワノ・アルポー Thoinot Arbeau 著『オルケゾグラフィ *Orchésographie*』の中の記述が最初である⁽¹⁸⁾。

トワノ・アルポーは、ラングルの司教座聖堂参事会員を務めていたジャン・タブロ Jean Tabourot (1520-1595) の筆名 (本名の Jehan Tabourot のアナグラム) である。初版本と考えられる原典は2種類あり、いずれも内容は同じだが、1種類には1589年出版の記載があり、もう1種類には出版年の記載がない。2種類の初版本の巻末には、版権の許可状要約が掲載されており、それによれば、この著作の版権は1588年11月22日にプロワにおいて王より与えられ、6年間有効となっている。前述のMGG第2版のアルマンドの項目に引用されているこの著作の出版年は、現代のいくつかの文献に見られるものと同様に1588年となっているが、これは版権獲得の年であり、出版年の記載がない原典がこの年に出版されたという根拠はない。

さて、この「オルケゾグラフィ」の中のアルマンドの項は、どのように記されているのだろうか。注(1)で触れたように、筆者も参加している古典舞踏研究会の原書講読会ではこの著作を翻訳中で、いずれ出版を予定しているが、以下に現在の仮訳と原文を示しておきたい。なお、上記原書講読会では、ディジョンの市立図書館所蔵の1589年出版の版を底本として使用している⁽¹⁹⁾。

「アルマンドはほどよい落ち着きをもった素朴な踊りで、アレマン人に親しまれているものです。また、これは私たちの遠い祖先のものと思われます。なぜなら、私たちはアレマン人の子孫なのですから」。(古典舞踏研究会原書講読会仮訳)

「L'allemande est vne dance plaine de mediocre gravité, familiere aux Allemâds, et croy qu'elle soit de noz plus anciennes, car nous sommes descendus des Allemands.」⁽²⁰⁾

問題は、原文の「familiere aux Allemands」の部分で、1925年に出版されたボウモントによる最初の英語訳⁽²¹⁾でも、1945年に出版されたエヴァンズによる英語訳並びにサットンによる新たな序文と注が加えられた1967年のその再版⁽²²⁾でも、いずれも「ドイツ人に親しまれている familiar to the Germans」と訳されている。MGG第2版のこの部分の引用箇所も、前述のように「ドイツ人によって踊られていた bei den Deutschen gebräuchlicher」とドイツ語訳されていた。

しかし、原文の「car nous sommes descendus des Allemands」の部分の「Allemands」

を、同様に「ドイツ人」ととらえると奇妙な問題が起こる。「私たちは nous」は、著者とその周辺の人々、さらに広くとれば、著者が属する民族すなわちフランス人としか考えられない。「descendus des」は「の子孫」としか訳せないで、「nous」がフランス人の場合、フランス人がドイツ人の子孫となってしまう。もちろん歴史的にはこれはありえない。では著者とその周辺の人々がドイツ人の子孫ということは考えられるのだろうか。後述するように、資料の上でそうした事実は全く見られない。ちなみにボウモントの英語訳もエヴァンズの英語訳も、ともにこの部分を「ドイツ人」と訳しており、前述の MGG 第 2 版ではこの部分を全く引用していない。

では、「Allemands」を「ドイツ人」以外の意味にとることは可能だろうか。現代フランス語辞典⁽²³⁾を見ると、「allemand, ande」は「ドイツの、ドイツ人」だが、語源をたどると、それは「Alaman(n)i, Aleman(n)i (アラマン族)」から来ている、となっている。「Alamans/Alamanni」の項目では、意味は「アラマン族」で、「ドイツ Allemagne の呼称はここに因る」とある。とすれば、『オルケゾグラフィ』のこの部分を「ドイツ人」ではなく、「アラマン人あるいはアレマン人」と考えることは充分可能である。われわれ原書講読会では、後述する理由から、「Allemands」を「アレマン人」ととらえると文章に矛盾がなくなるので、このように訳出した。

(iii) 17 世紀初めの文献

『オルケゾグラフィ』以後の文献で舞踏に関する記述がなされているものに、ドイツ人の作曲家ミヒャエル・プレトリウス Michael Praetorius (1571?-1621) が、1619 年にヴォルフエンビュッテルで出版した著作『シンタグマ・ムジクム Syntagma musicum』第 3 巻がある。そのアルマンドの項目は以下のようになっている。

「アルマンドは多くの場合、ドイツの歌あるいは踊りのことを言う。なぜなら、アルマーニャがゲルマニアを、またアルマンがドイツ人を意味するからである」。

「Alemande heist so viel als ein deutsches Liedlein oder Tanzlein: Denn Alemagna heist Germania, und un Alemand ein Deutscher.」⁽²⁴⁾

ここでは、アルマンドがドイツ起源だと断定している。なおプレトリウスは、1612 年に『テルプシコーレ *Terpsichore*』と題する舞曲集をヴォルフエンビュッテルで出版している⁽²⁵⁾。ここには、当時のヴォルフエンビュッテルの宮廷で踊られていた、フランスから伝えられた舞踏の伴奏音楽である何種類もの舞曲が、多数とりあげられているが、アルマンドは含まれていない。

一方フランスでは、フランソワ・ド・ローズ François de Lauze によって書かれた舞踏に関する著作『舞踏の賛美、そしてそれを男性並びに女性に手ほどきする申し分のない方法 *Apologie de la danse et la parfaite méthode de l'enseigner tant aux cavaliers qu'aux dames*』が、1623 年に出版されている⁽²⁶⁾。ここでは数種類の舞踏の踊り方が紹介されているが、アルマンドには触れられていない。

また、数学者や哲学者として活動した 17 世紀前半のフランスの知識人マラン・メルセンヌ Marin Mersenne (1588-1648) は、当時の音楽理論の集大成である『総合音楽論 (アルモニ・ユニヴェルセル) *Harmonie universelle*』を、1636 年から翌年にかけてパリで出版しており、その第 2 巻の中で、リュートのための独奏曲の例として舞曲のアルマンドを 3 曲紹介している⁽²⁷⁾。しかし、アルマンドの起源についての言及はなく、舞踏のアルマンドについてはこの書ではとりあげられていない。

3. アレマン人とその支配地域

(1) アレマン人とは

さて、前述のアルポー著『オルケゾグラフィ』の中の「Allemands」を「アレマン人」と考えた時、そのアレマン人とは一体どのような人々なのかを確認しておく必要があるだろう。

アレマン人に関しては、ドブシュの著作⁽²⁸⁾、長友栄三郎氏の著作⁽²⁹⁾ など、古代ローマの歴史を扱った研究書、あるいはイム・ホーフの著作⁽³⁰⁾ など、スイスの歴史を扱った書からその実態を知ることができるが、中でも、岩谷道夫氏による論文「スエービーとアレマンネン」⁽³¹⁾ は、アレマン人とそのもととなったスエービーについて直接論じたものであり、彼らについての具体的な動向を把握できる重要な文献と言える。そこで、ここではこの岩谷氏の論文を中心に、他の文献も参考にしながら、アレマン人についてまとめてみたい。

アレマン人は、古代ゲルマン民族の一部族（アレマン族、アラマン族）に由来する人々で、ラテン語でアラマンニ Alamanni、フランス語でアレマン Alémans あるいはアラマン Alamans、ドイツ語でアラマンネン Alamannen あるいはアレマンネン Alemannen と呼ばれる。

アレマン人のもとをたどると、ゲルマン人諸部族の中で主導的な立場にあった部族スエービー Suebi に行きつく。部族スエービーについては、古代ローマの政治家ユリウス・カエサル Caius Julius Caesar (前 100-前 44) の著作『ガリア戦記 *Caesarius Commentarii de Bello Gallico*』(前 52 頃)の中に記述がある⁽³²⁾。もともとエルベ河の下流域から中

流域にかけて居住していたスエービーは、やがてエルベ河の上流へと向かって南下する。そしてエルベ河が支流ザーレ川と合流する地点で2手に分かれ、ひとつは、ザーレ川に沿って上流へと進み、テューリンゲンから西のヘッセンへ向かってライン河沿岸地域に達し、ライン河を遡ってマインツに到り、そこを拠点にドイツ南西部に定住する。もうひとつは、そのままエルベ河に沿って進み、エルベ河がヴルタヴァ（モルダウ）河と名前を変えるボヘミア平原まで到り、そこを拠点に定住する。カエサルが出会ったスエービーは、ライン河一帯に移住した前者のスエービーである。

カエサルの著作以後、ゲルマン民族について記した文献として重要なものに、コルネリウス・タキトゥス Publius Cornelius Tacitus（後 56/57 生）の『ゲルマーニア *Germania*』（後 97/98）がある⁽³³⁾。この中でもスエービーは登場するが、ここではゲルマン人諸部族のうちの一部族として記述されている。彼らは、北海沿岸からバルト海にかけての北ドイツ一帯に居住していた。

ところで、カエサルの『ガリア戦記』とタキトゥスの『ゲルマーニア』には、アレマン人についての言及はない。アレマン人（アレマン族）が初めて文献に登場するのは、3世紀のギリシア人の歴史家カッシウス・ディオ Cassius Dio（155 頃-235 頃）が著した『ローマ史』の中でであり、皇帝カラカラ Caracalla（在位 211-217）が、213 年にマイン河畔でアレマン族と戦い、帝国への侵入を防いだと記されている。

現代の研究者の間では、アレマン族は、それまでの部族スエービーを構成していた諸部族の中核に位置していたセムノーネスを中心に再編されたもの、という認識で共通している。アレマン族はその後、ローマ帝国領へ頻りに侵入し、何度か撃退されている。395 年にローマ帝国が東西に分裂したあと、455 年頃に、南ドイツに勢力を拡大したアレマン族がガリアに侵入し、やがてライン河上流地域やアルザス地方、ストラスブールとアウクスブルクの間の地域に定着しはじめる。

476 年に西ローマ帝国が滅亡したあと、フランク族の王クロヴィスがソワソンの戦いでガリアの支配者を破り、ロワール河以北を征服してメロヴィング王朝を建設するが、そのフランク王クロヴィスが、496 年、トルビアックの戦いでアレマン族を撃破する。以後アレマン族はクロヴィスの支配下にはいり、アレマンニア *Alemannia* を統治することになる。

このメロヴィング王朝時代のフランク王国で、トゥールの司教として活躍したグレゴリウス Gregorius（538-594）は、大著『フランク史』を著わしているが、その中で何度もアレマン人に言及している。興味深いのは、著者がアレマン人とスエービー人を同じ民族として扱っている点である⁽³⁴⁾。

751 年、メロヴィング家のフランク王が廃位され、カロリング家の宮宰小ピピンがフラ

ンク王となり、カロリング王朝が始まるが、843年、ヴェルダン条約によりフランク王国が3分割される。その時アレマンニアは東フランク王国に属することになる。911年、カロリング家の東フランク王が没してカロリング家が断絶し、コンラート1世（在位911-918）が東フランク王になったあと、アレマンニアの支配者が917年に公位を獲得し、この時からアレマンニアはシュヴァーベン Schwaben 公国として知られるようになる。シュヴァーベンの名称は、古代ゲルマン民族の部族名スエービーのドイツ名である。ちなみにシュヴァーベン公国は、公位を継いできたシュタウフェン家が1268年に断絶して消滅するまで続くことになる。

以上、アレマン族（アレマン人）の変遷を、フランス史とドイツ史の通史⁽³⁵⁾も参考にしながら、同時代のヨーロッパの動きの中でまとめると、以下の表ようになる。

ヨーロッパの流れ	アレマン（アラマン）人の動き
前58 ユリウス・カエサル、ガリア総督となり、ガリアに遠征。	前52頃 カエサル、『ガリア戦記』を刊行。この中に、のちのアレマン族（アレマン人）につながるゲルマン民族の部族スエービーについての記述あり。ここではスエービーは、ゲルマン人諸部族の中で主導的な立場にあった。
前51 カエサル、ガリアを征服。	
前27 ローマのオクタウィアヌス、元老院よりアウグストゥスの尊称を受け、初代皇帝となる。	
	後97/98 コルネリウス・タキトゥス、『ゲルマーニア』を刊行。この中でスエービーは、ゲルマン人諸部族のうちの一部族として記述されている。
	213 皇帝カラカラ、マイン河畔でアレマン族と戦い、帝国への侵入を防いだとの記述が、カッシウス・ディオによってなされる。これが

- 後253 ゲルマン民族の一部族フランク族がガリアに侵入。以後ローマ領へ頻繁に侵入する。
- 275 フランク族がガリアに侵入。
- 293 皇帝ディオクレティアヌス、帝国四分統治体制樹立。
- 324 皇帝コンスタンティヌス、ローマ帝国再統一。
- 330 皇帝コンスタンティヌス、ローマからビュザンティオンに遷都し、同市をコンスタンティノポリスと改名。
- 358 フランク族の主力サリー支族、ローマの同盟者としてトクサンドリア地方に定着。
- 375頃 ゲルマン民族、大移動を開始。
- 395 ローマ帝国東西に分裂。
- 406 ブルグント族をはじめとするゲルマン諸族、ガリアに侵入。ブルグント族、やがてガリア南東部に定着。
- 455頃 フランク族のリプアリー支族、
- アレマン族（アレマン人）が文献に登場する初出。以後アレマン族がローマ領へ頻繁に侵入。
- 259 この年から翌年にかけて、アレマン族がローマ領に大規模な侵入を行なう。
- 275 アレマン族がガリアに侵入。
- 298 アレマン族、ライン河を越えてアルザスとスイスに侵入。西方副帝（ガリアの統治者）コンスタンティウス、ラングル平原でアレマン族を撃退。
- 357 副帝ユリアヌス、ストラスブールの戦いでアレマン族に勝利。以後アレマン族は、4世紀の後半に何度もローマ領への侵入を試みる。
- 374 皇帝ヴァレンティニアヌス、アレマン族と和を結ぶ。
- 455頃 南ドイツに勢力を拡大したアレマ

- モーゼル川流域に広がる。
- 476 西ローマ帝国滅亡。
- 486 フランク王クロヴィス、ソワソンの戦いでガリアの支配者を破り、ロワール河以北を征服。メロヴィング王朝を建設。
- 496 フランク王クロヴィス、トルビアックの戦いでアレマン族を撃破。以後アレマン族はクロヴィスの支配下にはいり、アレマンニア *Alemannia* を統治する。
- 534 フランク、ブルグント王国を併合。
- 706 フランク王国宮宰中ピピン、アレマン族を攻撃、712年に征服。
- 751 メロヴィング家のフランク王廃位され、カロリング家の宮宰小ピピンがフランク王となり、カロリング王朝始まる。
- 843 ヴェルダン条約によりフランク王国3分割。
- 843 アレマンニアは東フランク王国に属す。
- 870 メルセン条約によりフランク王国が改めて分割される。
- 917 アレマンニアの地はシュヴァーベン *Schwaben* 公国となる。
- 1268 公位を継いできたシュタウフェン家断絶により、シュヴァーベン公国消滅。

(2) アレマンニアとシュヴァーベン

ここで、アレマン族（アレマン人）の支配地域であるアレマンニア（シュヴァーベン）が、具体的にどのあたりに位置していたのかを確認しておきたい。

フランスの歴史地図帳によれば、フランク王国のメロヴィング王朝支配下にあった7世紀後半のアレマンニアは、現在のドイツ南西部にあたる、ライン河上流の東側バーデン=バーデンあたりから、シュトゥットガルトを経てドナウ河上流のウルムあたりまでを北限に、バーデン=ヴュルテンベルク州の南部の地域、そして、バーゼルあたりからライン河をさかのぼってボーデン湖あたりまでの地域の南側、ルツェルン、チューリヒ、ザンクト・ガレンなどを含むスイス北部の地域に広がっていた⁽³⁶⁾。そのアレマンニアの東側にはバイエルン公領があるが、ドナウ河の支流レヒ川沿岸のアウクスブルクは、この時点ではバイエルン公領に含まれていたことがわかる。実はこのバイエルンを支配していたのは、前述のカエサル『ガリア戦記』に出てくるスエービーのうち、のちにアレマン族として再編されることになる人々から分かれ、東のボヘミアの地に移住し、やがてドイツ南東部へと移り住んだ人々である⁽³⁷⁾。つまり、アレマンニアの人々とバイエルンの人々は、元をたどれば同じ民族だったことになる。

一方、東フランク王国の支配下にはいり、シュヴァーベン公国の名称で知られるようになった10世紀から11世紀にかけてのアレマンニアは、ドイツの歴史地図帳によれば、バーゼルより南側のスイスの一部を失うとともに、南西ドイツの西側と東側にそれぞれ少し領域を広げていることがわかる⁽³⁸⁾。すなわち、ライン河を越えた西側の、ストラスブールを含むアルザス地方あたりまでと、レヒ川を少し越えた東側の、アウクスブルクを含む一帯までがシュヴァーベンの領域にはいつていたわけである。

(3) シュヴァーベンとアルマンド

ところで、18世紀前半に中部ドイツで活躍したオルガニストで作曲家のヨハン・ゴットフリート・ヴァルター Johann Gottfried Walther (1684-1748) は、1732年に『音楽事典 *Musicalisches Lexicon*』をライプツィヒで出版しているが⁽³⁹⁾、そのアルマンドの項目に興味深い記述がある⁽⁴⁰⁾。その項目は、まずイタリア語のアッレマンダ *Allemanda* およびアッラマンダ *Allamanda* で立てられ、フランス語でアルマンド *Allemande* がそのあとに添えられている。そこでは次のように説明されている。

「アルマンドはドイツの楽曲、あるいは、おそらくはシュヴァーベンの歌である。なぜなら、かつてアレマン人がシュヴァーベン地方を支配していたからである。Die

Allemande ist ein teutsches Klingstück, oder vielmehr schwäbisches Lied, weil vorzeiten die Alemannen Schwaben Land besessen.]

つまりヴァルターはここで、アルマンドは、アレマン人の支配地域であるシュヴァーベンに起源をもっていると示唆しているのである。このヴァルターの説は、その後の18世紀の音楽家たちに影響を与えてゆく。

たとえば、フランスの思想家ジャン=ジャック・ルソー Jean-Jacques Rousseau (1712-1778) は、1768年に『音楽事典 *Dictionnaire de musique*』をパリで出版しているが⁽⁴¹⁾、そのアルマンドの項は2つあり、第1の項は音楽作品としての舞曲の説明、第2の項は舞踏の音楽の説明で、第2項は次のようになっている⁽⁴²⁾。

「アルマンドはまた、スイスやドイツで一般に有力な舞踏の音楽である。Allemande, est aussi l'Air d'une Danse fort commune en Suisse & en Allemagne.」

ここで言うスイスは、シュヴァーベンの南西部の地域を指しているのではないかと考えられる。

また、シャルル・コンパン Charles Compan が、1787年にパリで出版した『舞踏事典 *Dictionnaire de danse*』のアルマンドの項⁽⁴³⁾では、アルマンドのことを「スイスやドイツで一般に有力で、フランスではきわめて古い舞踏 Danse fort commune en Suisse & en Allemagne, & très-ancienne en France」と述べている。

アルマンドとシュヴァーベンあるいはスイスとの関連が文献に現われるのは、このように18世紀にはいつてからだが、ちなみに、フランスの作曲家で理論家のセバスティアン・ド・ブrossard Sébastien de Brossard (1655-1730) が、1703年にパリで出版した『音楽事典 *Dictionnaire de musique*』では、アルマンドの項は立てられておらず、代わりにイタリア語のアッレマンダ Allemanda の項があり、それが音楽作品であることの記述があるだけである⁽⁴⁴⁾。

これら18世紀の事典などに見られる、シュヴァーベンあるいはスイスのアルマンドについては、20世紀の音楽学者ハンス・ハインリヒ・エッグブレヒト Hans Heinrich Eggebrecht が中心となったマインツの学術・文学アカデミーから出されている『音楽用語中辞典 *Handwörterbuch der musikalischen Terminologie*』の中の、ライナー・グストライン Rainer Gstrein 執筆のアルマンドの項では、16世紀以来の舞踏およびその伴奏音楽、さらにはそこから派生した観賞用の音楽としての舞曲とは別のものである、スイスとシュヴァーベンの民族舞踏として認識されている⁽⁴⁵⁾。つまりそこでは、アルマンドを3つの

種類に分け、第1は、16世紀以来宮廷を中心に踊られていた社交のための舞踏、第2が、スイスやシュヴァーベン民族舞踏、そして第3が、踊りの伴奏音楽である舞曲と、そこから派生し、17世紀以来組曲のひとつに組み入れられていった観賞用の音楽、としているのである。

4. 『オルケゾグラフィ』の著者ジャン・タブロ

次に、前述のように、アルポー著『オルケゾグラフィ』の中の「car nous sommes descendus des Allemands」を、われわれ原書講読会の仮訳のように「なぜなら、私たちはアレマン人の子孫なのですから」と訳した場合、「私たち nous」は、著者とその周辺の人々とするのが自然だろう。そこで、著者やその周辺の人々がアレマン人の子孫と考えてよいかどうかを検討してみることにしたい。

(1) 『オルケゾグラフィ』と著者

『オルケゾグラフィ』はトワノ・アルポー著となっているが、前述のように、トワノ・アルポーはジャン・タブロの筆名である。この著作の本文は、69歳のトワノ・アルポーと青年カプリオル Capriol との対話形式になっており、カプリオルがアルポーから様々な舞踏の踊り方を説明してもらう、という内容である。

2種類の初版本の表題頁の裏側には、ともに、この書の出版者ジャン・デ・プレ Jean Des Preys が、ギヨーム・タブロ Guillaume Tabourot (1573/74-1644) という人物に宛てた献辞がある。ギヨーム・タブロは、著者ジャン・タブロの甥エティエンヌ・タブロ Etienne Tabourot (1549-1590) の息子にあたる。一般に、こうした書籍に付された献辞というのは、著者がそのパトロンなどに宛てたものが多いのだが、出版者が著者の甥の息子に宛てるというのは異例といえよう。著者ジャン・タブロに関する詳細な論文を著したジョルジュ・ヴィアール Georges Viard によれば、出版者ジャン・デ・プレは、子供の頃からジャン・タブロによって育てられた人物で、タブロが手に入れた印刷機械設備を使って印刷の技法を習得した⁽⁴⁶⁾。そして、1582年出版のタブロの最初の著作『暦算法 *Compt et Manuel Kalendrier*』をはじめ、タブロ作の小冊子などを出版してきた。そうした出版者が、恩人の著者の甥の息子に宛てた献辞を書くというのは、それなりの意味をもっていたと考えられる。

タブロ家というのは、15世紀あたりから台頭した法服貴族の一族で⁽⁴⁷⁾、『オルケゾグラフィ』が出版された時に15歳位であった将来の法服貴族であるギヨーム・タブロがこの書を献呈されたのは、むしろ自然なことだった。当時、舞踏というのは、法服貴族にとっ

て礼儀作法のひとつとして身につけるべきもので、『オルケゾグラフィ』の目的はそこにあった⁽⁴⁸⁾。本文でアルポーが対話をしている青年カプリオルは、ギヨーム・タブロをモデルとしているのではないかと考えられるのである。

こうしてみると、前述の「われわれ」とは、著者ジャン・タブロとその甥の息子ギヨーム・タブロのことを指すのではないかと考えられる。さらに言えば、それはタブロ家全体のことであり、当該の文は、タブロ家の人々はアレマン人の子孫だと言っていることになる。では、そのことは確認できるのだろうか。そこでまず、著者ジャン・タブロの経歴をみてみることにしたい。

(2) ジャン・タブロとその一族

ジャン・タブロは、1520年3月17日に、ブルゴーニュ地方の中心都市ディジョンに生まれた⁽⁴⁹⁾。父親は、当時ディジョンの王室会計院傍聴官 *Auditeur des comptes du Roy* を務め、ディジョンの北方にあるヴェロンヌの領主でもあったピエール・タブロ *Pierre Tabourot* であり、ピエールの父親ジャン *Jean* は、15世紀の後半に、シャロレ伯シャルル（のちのブルゴーニュ公シャルル・ル・テメレル）の書記官 *secrétaire* を務めていた人物だった。このジャンの祖父アントワヌ *Antoine* は、15世紀初頭に活躍したディジョンの市民であったから、タブロ家は、少なくとも15世紀以来ディジョンに住み、やがてディジョンの有力者となっていった一族であったことがわかる⁽⁵⁰⁾。

ジャン・タブロの母親は、ラングルの西にあるギュルジの領主だったピエール・ピニャール *Pierre Pignard* の娘ディディエール *Didière* で、彼女の兄弟には、1505年からラングル司教座聖堂参事会員を務めていたジャン・ピニャール *Jean Pignard* (1488頃-1550) がいた。ピエール・ピニャールの父親ギ・ピニャール *Guy Pignard* は、フランス王ルイ12世とフランソワ1世に書記官 *secrétaire* として仕え、ラングル総督 *Baillif* (地方の行政、司法、軍事を担当する国王代官) を務めた人物であり、母親はグレの貴族の娘であった⁽⁵¹⁾。つまりピニャール家は、ラングルに拠点を置く有力な一族であったことがわかる (本論文末尾の系図参照)。

ピニャール家の拠点ラングルは、ディジョンの北東60キロのところにある町で、現在ではそれほど大きな都市とはいえ、わが国にもその名はほとんど知られていないが、中世以来、ここはラングル司教区の中心地としてまことに重要な役割を担っていたところだった⁽⁵²⁾。その重要性は16世紀まで続いていた⁽⁵³⁾。ジャン・タブロの母方の叔父ジャン・ピニャールが、ラングル司教座聖堂参事会員であったことは、ジャン・タブロ自身ばかりでなく、タブロ家の人々に大きな影響を与えてゆき、タブロ家は、16世紀以降、世俗の分野ではディジョンを拠点として、教会の分野ではラングルを拠点として、それぞれ

重要な地位を占め続けることになる。

ジャン・タブロが生まれた翌年にあたる1521年、ジャンの兄ギ・タブロ Guy Tabourot が、ラングル司教座聖堂参事会員となり、1523年までこの地位を保ってゆく。さらにギの弟でジャンの兄のジャック・タブロ Jacques Tabourot も、1527年に同司教座聖堂参事会員となり、1554年までこの地位にあった⁽⁵⁴⁾。1526年、ギは俗界に戻って、父ピエールのディジョンでの地位を受け継ぎ、王室会計院傍聴官となった。父ピエールは、1529年にブルゴーニュ大法官府検査官 *Contrôleur à la chancellerie de Bourgogne* という要職に就いている。さらにピエールは、1532年にディジョン副伯 *Vicomte-mayeur de Dijon* の地位にも就いている⁽⁵⁵⁾。ピエールが就いたブルゴーニュ大法官府検査官の地位は、その後ギに受け継がれることになる⁽⁵⁶⁾。

1544年、ジャンのすぐ上の兄ギヨーム・タブロ Guillaume Tabourot (1515-1561) が、ディジョンの王室会計院 *Chambre des Comptes de Dijon* の評定官 *conseiller* となったが、法学士 *licencié de droit* の学位をもち、ディジョン近郊のサン・タポリネールの領主 *Seigneur de Saint-Apollinaire* でもあった彼は、この地位を死ぬまで保つことになる⁽⁵⁷⁾。その長男で前述のエティエンヌ・タブロ (1549-1590) は、のちに国王諮問会議付評定官 *conseiller du Roy* 並びにディジョン・バイイ裁判所首席検事 *procureur au bailliage de Dijon* の要職に就き、次男のテオデクト・タブロ Théodecte Tabourot は、ラングル司教座聖堂参事会員となるのである⁽⁵⁸⁾ (系図参照)。

ジャン・タブロは、青年時代に、ロワール河の南にある古都ボワティエの大学で学び、そこで法学士の学位を取得した⁽⁵⁹⁾。1546年7月、ジャンは、ラングルのサン=マメ (マメース) *Saint-Mammès* 司教座聖堂の参事会員となった。ただし、その立場は平聖職者の参事会員 *chanoine cleric* であった⁽⁶⁰⁾。しかし、1549年には司祭の参事会員 *chanoine prêtre* に昇格している⁽⁶¹⁾。

1556年、ジャンは、ラングルの西にある重要都市パール=シュル=オーブのサン=マクル参事会教会 *collégiale Saint-Maclou* の参事会員ともなり、1565年には、この教会の財務官 *trésorier* の地位にも就いている。この地位は1588年に辞するまで続けられた⁽⁶²⁾。またラングル司教座聖堂では、1566年に参事会の会計院傍聴官 *auditeur des comptes* となり⁽⁶³⁾、翌1567年には、同司教座聖堂の聖歌隊長 *chantre* ともなっている⁽⁶⁴⁾。さらに1575年には、同司教座聖堂の副会計係 *vice-chambrier* を一時的に務めているし⁽⁶⁵⁾、翌1576年には、同司教座聖堂参事会管区の憲兵隊長 *capitaine des gens d'armes* という役職にも任命されている⁽⁶⁶⁾。

1583年4月27日、ジャンは、ラングル司教座聖堂参事会員の地位を、兄ギヨームの次男テオデクトに譲っているが、1587年、別の参事会員ジャン・ベルネル Jean Bernel か

ら参事会員の地位を手に入れ、4年にしてこの地位を回復するのである。結局この地位は、以後死ぬまで維持することになる⁽⁶⁷⁾。

司教座聖堂参事会員の地位を回復してしばらく経ったあと、おそらくは1589年に、問題の『オルケゾグラフィ』が出版されることになる。1593年になって、ジャンはラングル司教座聖堂聖歌隊長の職をやめ、甥のテオデクトにそれを譲っている。また同じ年、バロワ（ショーモン、シャトーヴィラン、パール=シュル=オーブを含む地方）の司教代理 archidiaque の地位に就いている⁽⁶⁸⁾。しかしその2年後、ラングルの司教座聖堂の重要な地位を歴任してきたジャンは、1595年7月29日、臨終の秘蹟を受けたあとで亡くなり、その遺体は、翌7月30日にラングルのサン=マメ司教座聖堂の中に埋葬された⁽⁶⁹⁾。

以上のように、ジャン・タブロは、ディジョンの有力者の一族の家に生まれ、母方の関係からラングルの司教座聖堂の重職に就き、教養人として、『暦算法』と『オルケゾグラフィ』という2つの重要な著作を世に出した人物であったことがわかる。

(3) ジャン・タブロのルーツ

こうして、ジャン・タブロの父方と母方の一族をたどっても、アレマン人に直接結びつく資料は出てきていない。しかし、間接的にアレマン人と接点をもっていたのではないかと思われる事実も存在している。

まず、ジャンの母方のピニヤール家はラングルを拠点としていた一族だが、この一族のルーツをどこまでたどることができるかはわからないとしても、このラングルの町は、298年にアレマン人の攻撃を受けたものの、それを撃退している⁽⁷⁰⁾。

一方、ジャンの父方の曾祖父にあたるアントワヌ・タブロは、タブロー族の子孫にあたるある女性についての研究を通じてわかったことによると、ジュラ地方のサン・クロード St Claude の出身であった⁽⁷¹⁾。サン・クロードというのは、現在のスイスの西南にあるレマン湖の西の方にあり、ディジョンから東南にあたる、ジュラ山脈南部の西麓にあるフランスの町である。サン・クロード一帯は、古代のゲルマン民族のうちのブルグント族が支配していたところで、古代から中世にかけてブルグント王国の領域に含まれていた。ブルグント王国の北東部にアレマンニア（シュヴァーベン）があるが、古代末期から中世初期にかけて、ブルグント族とアレマン族の交流は盛んで、11世紀から12世紀にかけては、東フランク王家がブルグントとシュヴァーベンを直接統治していた。したがって、アレマン族のうちの何人かがブルグントに進出し、定住していったことは容易に考えられる。とすれば、アントワヌ・タブロの祖先がアレマン人であった可能性は充分あるのではないだろうか。

ところで『オルケゾグラフィ』には、サン・クロードについて言及したところがひとつ

だけある。それは、踊りの伴奏楽器のひとつについて述べた部分で、次のように記述されている。

「私は、プトレマイオスがイウラッス山（ジュラ山脈）と呼んだサン・クロード山に由来する複笛が演奏されているのを見たことを思い出します」。(古典舞踏研究会原書講読会仮訳)

「Il me souvient d'auoir veu iouer d'une flutte double venant du mont saint Claude que Ptolomée appelle le mont Iuras …」⁽⁷²⁾

これを見ると、著者が曾祖父の出身地をある程度念頭に置いていたのではないかと想像できよう。

『オルケゾグラフィ』の記述でもうひとつ興味を引くのは、スイス人について言及している部分が2箇所あることである。『オルケゾグラフィ』では、初めに、舞踏を習得する意義が語られ (f.2r-6v)、続いて本題の舞踏の実践の話にはいるが、まず戦闘の踊りについて説明される (f.6v-21r)。戦闘の踊りとは、実際には戦闘行進のことで、その中で「スイス人傭兵の鼓手 Le tambour des Suysstes」が紹介されている⁽⁷³⁾。さらに、戦闘行進で使われる楽器のひとつフィフルが紹介され、それはスイス人によって使われる、と述べられている⁽⁷⁴⁾。実はこの「スイス人」と並んで、フィフルを使う民族がもうひとつ紹介されている。原文は「Allemandz & Suysstes」なのだが、ここでの「Allemandz」は「ドイツ人」ではなく「アレマン人」なのではないだろうか。『オルケゾグラフィ』の中で「Allemands」あるいは「Allemandz」が出てくるのは、問題のアルマンドに関する説明のところとここしかない。仮にアルマンドの箇所での「Allemands」が「アレマン人」だとしたら、フィフルについてのこの箇所も「アレマン人」と考えるのが自然である。アレマン人とスイス人が並列されていることも、歴史的に見れば納得がいく。

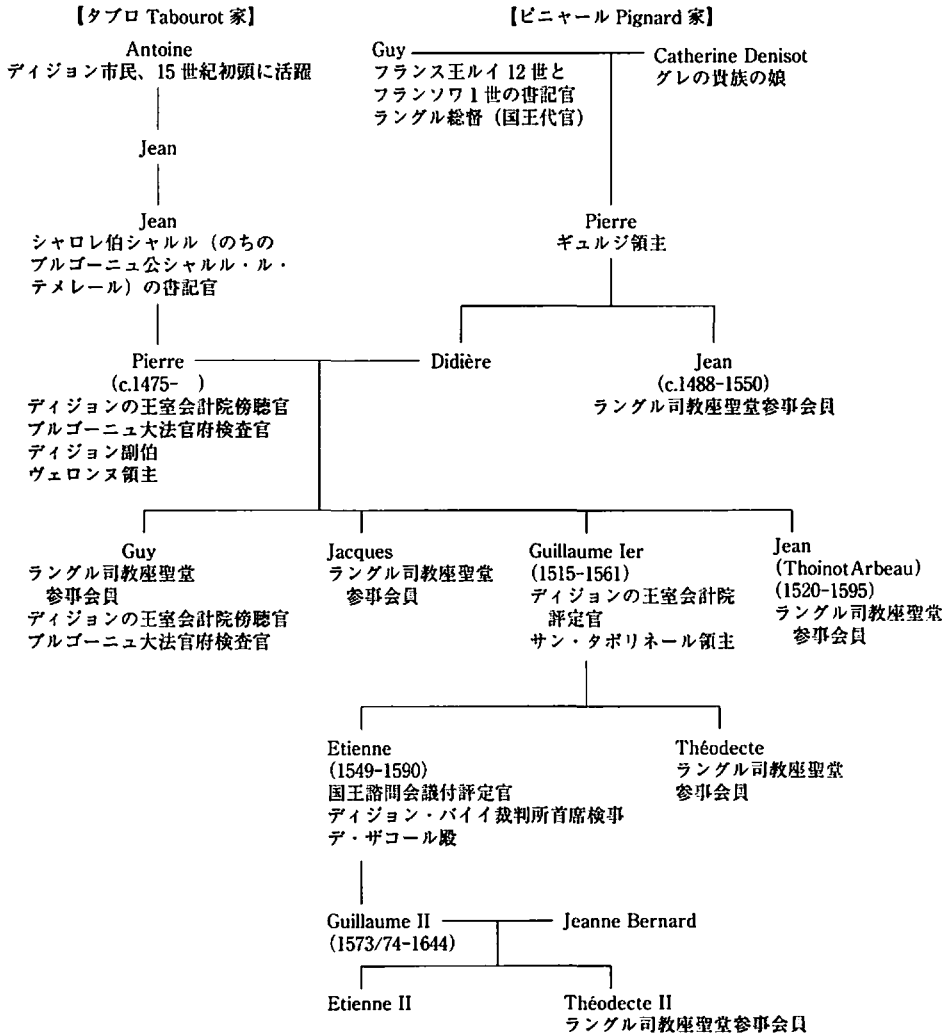
結 び

以上、『オルケゾグラフィ』の著者ジャン・タブロが、アルマンドはもともと、アレマン人によって踊られていたものと思われる、と述べている意味を検討してきたが、断定はできないものの、アルマンドの起源がアレマン人にある可能性は高いように思われる。モンテーニュが、アウクスブルクの上流階級の人たちがアルマンドばかりを踊っていた、と証言しているのも、アウクスブルクの町が、モンテーニュの時代にはアレマン人の支配地であるアレマンニア（シュヴァーベン）に属していたことを考えれば、当然のことだとも

言えよう。

一般にドイツという地域名は、現在のドイツ連邦共和国の領域とほぼ同一のようにとらえられているが、歴史的には必ずしも一致しないことが多い。少なくともアルマンドの起源をドイツだと一般化してしまうのは、再考を要することではないだろうか。

タブロ家系図



《注》

- (1) 本論は、主として15世紀から18世紀までの時期にヨーロッパで踊られていた舞踏の研究、再現を行ない、さらにその普及を目的として活動している、わが国の古典舞踏研究会の原書講読会による、アルポー著「オルケゾグラフィ」翻訳の過程で浮かびあがった問題をきっかけとし、筆者が、2015年3月10日に音楽史研究会例会（於、工学院大学）で発表した研究報告「アルマンドはドイツ起源なのか？」にもとづいている。
- (2) Rebecca Harris-Warrick, "Allemande." *International encyclopedia of Dance*, vol. 1, pp. 45-47, 1998.
- (3) Monika Woitas, "Allemande." *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*, Zweite, neubearbeitete Ausgabe, Sachteil I, 1994, pp. 462-470.
- (4) Meredith Ellis Little and Suzanne G. Cusick, "Allemande." *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, Second Edition, vol. 1, 2001, pp. 394-398.
- (5) Harris-Warrick, *Allemande*, *op. cit.*, p. 45.
Woitas, *Allemande*, *op. cit.*, p. 463.
Little and Cusick, *Allemande*, *op. cit.*, p. 394.
- (6) Guglielmo Ebreo da Pesaro, *De pratica seu arte tripudii*, ed. and trans. by Barbara Sparti, Oxford, 1993.
- (7) Henri Vanhulst, *Catalogue des Éditions de musique publiées à Louvain par Pierre Phalèse et ses fils, 1545-1578*, Bruxelles, 1984, pp. 8-10.
- (8) *Ibid.*, pp. 16-18.
- (9) Ute Meissner, *Der Antwerpener Notendrucker Tylman Susato*, II, Berlin, 1967, pp. 72-75.
- (10) François Lesure et Geneviève Thibault, *Bibliographie des éditions d'Adrian le Roy et Robert Ballard*, Paris, 1955, pp. 51-52.
- (11) *Ibid.*, p. 52.
- (12) *Ibid.*, p. 54.
- (13) François Lesure (dir.), *Répertoire international des sources musicales, Recueils imprimés XVI^e-XVIII^e siècles*, München, 1960, p. 189.
- (14) Daniel Hearts, *Pierre Attaingnant, Royal Printer of Music*, Berkeley, 1969, pp. 375-376.
- (15) François Lesure et Geneviève Thibault, "Bibliographie des éditions musicales publiées par Nicolas du Chemin (1549-1576)" (*Annales Musicologique*, i Neuilly-sur-Seine, 1953), pp. 329-330, 333.
- (16) 関根秀雄、斎藤広信訳『モンテーニュ旅日記』、白水社、1992、p. 58。
- (17) Michel de Montaigne, *Journal de voyage*, Édition présentée, établie et annotée par Fausta Garavini, Paris, 1983, p. 128
- (18) この著作の原典、内容、著者等については、以下の拙論を参照。
今谷和徳「トワノ・アルポー著「オルケゾグラフィ」をめぐって」(『桐朋学園大学研究紀要』第27集、2001)。
- (19) Thoinot Arbeau, *Orchésographie*, Lagres, 1589. (Dijon, Bibliothèque municipale, no 9494 (16065))
- (20) *Ibid.*, f.67r.
- (21) *Orchesography, a Treatise in the Form of a Dialogue*, ... by Thoinot Arbeau, trans. by Cyril W. Beaumont, with a Preface by Peter Warlock, London : C. W. Beaumont, 1925. (2nd

- ed. New York : Dance Horizons, 1968, p. 109)
- (22) Thoinot Arbeau, *Orchesography*, trans. by Mary Stewart Evans, London: Kamin Dance Publishers, 1945. (2nd ed. with a new Introduction and Notes by Julia Sutton and a new Labanotation section by Mireille Backer and Julia Sutton, New York: Dover Publications, 1967, p. 125)
- (23) 『ロベール仏和大辞典』、小学館、1988。
- (24) Michael Praetorius, *Syntagma musicum III, Termini musici*, Wolfenbüttel, 1619, p. 25. (Facsimile, Kassel: Bärenreiter, 1978)
- (25) Michael Praetorius, *Terpsichore*, Wolfenbüttel, 1612. (Gesamtausgabe der musikalischen Werke von Michael Praetorius, vol.15, Wolfenbüttel, 1929)
- (26) François de Lauze, *Apologie de la danse et la parfaite méthode de l'enseigner tant aux cavaliers qu'aux dames*, 1623. (Reprint, Paris, Hachette Livre, 1920)
- (27) Marin Mersenne, *Harmonie universelle*, Paris, 1636-37, II, pp. 85-89. (Édition facsimilé, Éditions du centre national de la recherche scientifique, Paris, 1965)
- (28) Alfons Dopsch, *Wirtschaftliche und soziale Grundlagen der europäischen Kulturentwicklung aus der Zeit von Caesar bis auf Karl den Grossen*, Wien, 1923-24. (ドブシュ、野崎直治、石川操、中村宏訳『ヨーロッパ文化発展の経済的社会的基礎——カエサルからカール大帝にいたる時代の——』、創文社、1980)
- (29) 長友栄三郎『ゲルマンとローマ』、創文社、1976。
- (30) Ulrich im Hof, *Geschichte der Schweiz*, 1991. (U. イム・ホーフ、森田安一監訳『スイスの歴史』、刀水書房、1996)
- (31) 岩谷道夫「スエービーとアレマンネン——中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的背景(1)——」(『法政大学キャリアデザイン学部紀要 1』、2004)。
- (32) Gaius Julius Caesar, *Caesarius Commentarii de Bello Gallico*. (カエサル、國原吉之助訳『ガリア戦記』、講談社学術文庫、1994)
- (33) Publius Cornelius Tacitus, *Germania*. (タキトゥス、泉井久之助訳『ゲルマニア』、岩波文庫、1979)
- (34) Gregorius de Tours, *Gregori Episcopi Turonensis historiarum Libri X*. (トゥールのグレゴリウス、兼岩正夫、臺幸夫訳『歴史十卷(フランク史)』、東海大学出版会、I. 1975、II. 1977; トゥールのグレゴリウス、杉本正俊訳『フランク史 10巻の歴史』、新評論、2007)
- (35) 柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦編『世界歴史体系 フランス史』(1)、山川出版社、1995。成瀬治、山田欣吾、木村靖二編『世界歴史体系 ドイツ史』(1)、山川出版社、1997。
- (36) Joël Cornett (dir.), *Atlas de l'histoire de France, 481/2005*, Belin, 2012, p. 46.
- (37) 岩谷道夫「スエービーとアレマンネン」、前掲論文、p. 146。
- (38) Westermann Verlag, *Großer Atlas zur Weltgeschichte*, 1976, pp. 58-59.
- (39) Johann Gottfried Walther, *Musicalisches Lexicon, oder Musicalische Bibliothec*, Leipzig, 1732. (Facsimile, Kassel: Bärenreiter, 1967)
- (40) *Ibid.*, pp. 27-28.
- (41) Jean-Jacques Rousseau, *Dictionnaire de musique*, Paris, 1768. (Reprint, Hildesheim, Georg Olms Verlag, 1969)
- (42) *Ibid.*, p. 31.
- (43) Charles Compan, *Dictionnaire de danse, Paris*, 1787. (Faksimile, New York, Broude

- Brothers Limited, 1974), p. 8.
- (44) Sébastien de Brossard, *Dictionnaire de musique*, Paris, 1703. (Reprint, Genève, Éditions Minkoff, 1992)
- (45) Rainer Gstrein, "Allemande", *Handwörterbuch der musikalischen Terminologie*, Stuttgart, Franz Steiner Verlag, 1998.
- (46) Georges Viard, "Jean Tabourot, Chanoine de Langres et Maître à danser." *Jean Tabourot et son temps* (Langres, 1989), pp. 11-66.
- (47) タブロ家については、以下の2つの書が重要である。
Georges Choptrayanovitch, *Etienne Tabourot des Accords*, Dijon, 1935. (Reprint, Genève: Slatkin Reprints, 1970)
François Moureau & Michel Simonin (dir.), *Tabourot, Seigneur des Accords*, Paris, 1990.
- (48) 今谷和徳「トワノ・アルポー著『オルケゾグラフィ』をめぐって」、前掲論文、pp. 28-29.
- (49) Viard, "Jean Tabourot …", *op. cit.*, p. 12.
- (50) Choptrayanovitch, *Etienne Tabourot des Accords*, *op. cit.*, pp. 15-17.
- (51) Viard, "Jean Tabourot …", *op. cit.*, p. 59.
- (52) 中世における、司教区の中心地ラングルの重要性に関しては以下を参照。
渡辺節夫『フランス中世政治権力構造の研究』、東京大学出版会、1992。
- (53) ラングルに関しては、以下を参照。
André Journaux (dir.), *Histoire de Langres des origines à nos jours. La vie d'une cité*, Caen, 1988. (2^e ed., 1990)
- (54) Viard, "Jean Tabourot …", *op. cit.*, pp. 13-14.
- (55) *Ibid.*, p. 43.
- (56) *Ibid.*, p. 59.
- (57) Choptrayanovitch, *Etienne Tabourot des Accords*, *op. cit.*, p. 16.
- (58) *Ibid.*, p. 66. G. Viard, "Jean Tabourot …", *op. cit.*, p. 14, p. 60.
- (59) Viard, "Jean Tabourot …", *op. cit.*, p. 44.
- (60) *Ibid.*, p. 12.
- (61) *Ibid.*, p. 13.
- (62) *Ibid.*, p. 32.
- (63) *Ibid.*, p. 21.
- (64) *Ibid.*, p. 24.
- (65) *Ibid.*, p. 21.
- (66) *Ibid.*, pp. 33-34.
- (67) *Ibid.*, pp. 14-15.
- (68) *Ibid.*, p. 27.
- (69) *Ibid.*, pp. 56-57.
- (70) Journaux (dir.), *Histoire de Langres … op. cit.*, pp. 45-46.
- (71) Philippe et Bernadette Rossignol, "Famille Tabourot de Véronnes (Bourgogne, Guadeloupe)", *Généalogie et Histoire de la Caraïbe*, numéro 71, 1995.
- (72) *Orchésographie*, *op. cit.*, f.23v.
- (73) *Ibid.*, f.15v.
- (74) *Ibid.*, f.17v.